



魔人



川崎ゆきお

「この帽子をかぶるようになってから、あまりいいことはありません。路上でトラブルに巻き込まれたり、因縁を付けられたりします」

「普通の帽子じゃありませんか」

「以前のものより若々しい形だし、色なのですが、これが問題なのかもしれません」

「そんなことはないでしょ」

「帽子だけではなく、上着もです。この上着にしてからろくなことはありません」

「それは、言いがかりのようなもので」

「そうです。人様から言いがかりを付けられるので、自分自身に対しても言いがかりを付けたくなりました。そのため、言いがかりを含んだ帽子と上着です」

「まあ、御勝手に」

「それとこのカメラ、これを持ち出すと、同じようにいいことがない。不審者と間違われたり、何か怪しげな人に見られて、声を掛けられたりします。あなた、何をここでしているのですか、などとね」

「ほう」

「昨日などは、その帽子と上着とカメラのトリオでしたから、ろくなことはなかった」

「そのカメラは愛用のカメラですか」

「違います」

「帽子は」

「最近買ったものです」

「上着は」

「これも最近のものです」

「しかし、それが原因だとは思えません。それで、カメラはどんなカメラです。目立つような」

「普通のコンパクトカメラです。帽子も上着もカメラも普通です。よく見かけるような」

「魔除けが必要です」

「魔除け」

「その帽子も、上着も、カメラも、魔除け機能がないためです」

「魔除け機能」

「上着なら、防水加工とかあるでしょ。あれと同じです。その中に魔除け加工なり、魔除け機能があるのです」

「魔除けになる帽子ですか」

「そうではなく、魔除け加工が施されている帽子です。帽子は帽子、上着は上着、そんなものには最初から魔除け機能などは入っていません」

「それを入れるにはどうすればいいのですか」

「帽子なら、ちょっとしたものを付ければいいのです。バッジでも何でもかまいません。魔除けのアクセサリーを付けることです。上着もそうです」

「カメラは」

「魔除けストラップを付ければいいのです」

「そんなの、何処で売られています」

「ストラップは多いです。そういうのは、神社でも売られていますし、縁起もストラップは百均でもあります」

「あ、はい。じゃ、お守りのようなものですね」

「そうです」

「でも、今まで、そんなものを付けていなかったですよ。帽子も上着もカメラも」

「それらは長くあなたが愛用してきたものでしょ」

「そうです」

「じゃ、あなたの魔がそこに染みこんでいますから、それが効いたのでしょ」

「私は魔人か」

了